

グラウンデッド・セオリー・アプローチ ——労働研究への適用可能性を探る

若林 功
(昭和女子大学助教)

質的研究, 特にグラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下, GTA) を用いた研究の本数は近年増加傾向にあり, GTA は労働分野でも活用できる可能性が大いにあると考えられるにもかかわらず, 十分に活用されているとは言えない状況にある。そこで本稿では労働研究での活用可能性拡大の一助となることを目的に GTA の紹介を行った。まず GTA の概要や開発の経緯を説明した。GTA は, もともと社会学者のグレイザー (Barney G. Glaser) とストラウス (Anselm L. Strauss) が1960年代に開発したものであったが, 開発者のこの2人は次第に立場を変えていき, それぞれの手法を提唱するようになったこと, その後この2人を含む研究者がそれまでの流れを引き継ぎつつ, もともとのGTAを発展させ, 現在は数種類のバージョンのGTAの手法が存在することを示した。一方で, GTAには複数のバージョンがあるものの, 共通する要素もあり, その重なる部分について分析手順の概要を紹介した。次に労働研究への適用例について, 木下康仁の開発した修正版GTA (M-GTA) を用いたもの2本, GTAを用いたもの2本の, 計4本の研究の紹介を行った。最後に, 労働研究においてGTAを使用する意義や可能性について述べた。

目次

- I はじめに
- II GTAとは
- III 労働研究とGTA
- IV おわりに

I はじめに

質的研究への関心が高まってきていると言われる。戈木 (2013) によれば, わが国の医療系の学術雑誌における質的研究の数は増加傾向にあり, また質的研究の用いられている手法別に見ると, 質的調査の結果に基づいて理論を生成するグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach, 以下, GTA) を用いる研究は増加している。また筆者が CiNii (NII 学術情報ナビゲータ) で試みに「グラウンデッド・セオリー」の語を用いて検索を行ったところ, 表題から判断

してGTAの研究手法を解説した論文と思われるものを除くと, 2012~2014年において211件が該当した¹⁾。医学系に限らず, 一般的な学術研究においてGTAの適用が多くなってきていると言えよう。

一方, 労働研究においてはGTAが盛んに用いられているとは言えない状況である。試みに, 「産業」「労働」「職業」「就労」「就業」の用語と「グラウンデッド・セオリー」を掛けて同じくCiNiiにて検索をしたところ, 労働研究に相当すると考えられたのは7件に留まった。厳密に文献レビューをしているわけではないので, あくまで参考的情報ではあるが, 労働研究ではGTAは普及しているとは言えない可能性があると考えられよう。

そこで本稿は労働研究での活用可能性拡大の一助となることを目的とし, まずGTAとはどのようなものか, 開発の経緯, 複数あるGTAのパー

ジョン、共通する分析手順の概要を紹介する。次に労働研究への適用例について紹介を行う。そして、労働研究においてGTAを使用する意義や可能性について考察する。

II GTAとは

1 GTAの概要

GTAは質的研究法の代表的なものの一つであり、インタビューやフィールドワークでの観察等で得られた質的データからボトム・アップ的に、人と人との相互作用やそのプロセス・変化を説明・予測できる理論の生成を目的とした研究方法である。

GTAを質的研究として捉えるということは、当然ながらGTAにも質的研究の特徴が含まれるということになる。Hagner and Helm (1994)は、質的研究法が特に貢献できる領域として、①自然な環境下での行動の研究、②当事者にとってのその現象の意味や見方の研究、③新たな領域もしくはあまり探索されていない現象の研究、④複雑な社会的プロセスに関する研究、を挙げている。GTAもこれらに相当する研究テーマに適用されるべきであろう。逆に、研究変数が十分に把握されており、それらの変数間の関係を明らかにする(つまり仮説検証をする)ことや、変数間の因果関係を明らかにすることが目的であるならば、量的研究法を用いて研究計画を立てた方が合理的であると、戈木(2006)は指摘している。

本特集の論文で扱われているように、質的研究にもさまざまな種類がある。GTAは研究で扱う事例そのものを詳細に記述するというよりは、聴き取りや観察の結果得られた個別事象から共通の要素を抽出し、当該現象を説明できるような理論・モデルを生成することを目的とするものであり、この点は他の質的研究法との違いとなっている。つまり、GTAはその現象の構造や骨組みを抽出するための研究手法であると言える。この特徴から、例えば世に出た最初のGTAの分析結果である『死のアウェアネス理論と看護』(Glaser and Strauss 1965, 以下、『死のアウェアネス』)の訳者

の木下(1988)が指摘するように、GTAの結果は「何か冷たいものを感じたり」「サッと読めてしまう」(Glaser and Strauss 木下康仁訳 1988: 303)という印象を与える場合もある。

GTAは現象を説明する理論・モデルを生成するための研究手法であるとは言っても、質的研究であるので、もちろん、リッチなデータに基づいた「厚い記述(thick description)」が必要ではある。厚い記述とは「ある行為や出来事の断片を、それが置かれた具体的な状況・文脈や、そこに至った歴史的(短時間のエピソードも含む)な経過と併せて記述し、内包された意味構造を読み取る」ことである(南1991)²⁾。GTAの場合、変数や変数間の関係を抽象的に説明するだけではなく、どのような変数で、どのようなデータ(インタビューデータ等)から生成されたものなのか、変数間の関係としてはどのようなものが具体的にはあるのか、等が読者に伝わるように示される必要がある。

なお、GTAという研究手法によって、ある現象を説明するために生成された理論は「グラウンデッド・セオリー」、その研究手法は「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」と呼ぶことが定着しているようである。

2 GTAの開発の経緯

GTAは社会学者のグレイザー(Barney G. Glaser)とストラウス(Anselm L. Strauss)が開発したものである。彼らは病院でフィールドワークを行い、入院中のがん終末期の患者・家族と周囲の医療関係者がどのような相互行為を行っているのかを分析した。そして、患者自身は病名を告知されているのか、また告知されていなくても患者側が感じ取っているのか、という認識の違いにより周囲の医療関係者との相互行為のあり方が異なっていることや、またそのあり方が移行していくことを『死のアウェアネス理論と看護』(Glaser and Strauss 1965, 以下、『死のアウェアネス』)にて示した。これが、世に出た最初のGTAの分析結果である。

そこでは具体的には、間近に迫った患者の死をスタッフは知っていても、患者自身は知らない「閉鎖認識」、自分は死ぬのではないかと患者は疑っているのに、まわりの人々は患者が疑念を抱い

ているのを知りつつも、あえてそれを打ち消そうとする「疑念認識」、患者の死がもはや避けられないことを本人もスタッフも共に知っているのに、お互いに知らないふりをする「相互虚偽」、患者の死が避けられないことをスタッフ、患者双方が知っていて、かつ双方がそれを認め合う、ただし曖昧さもまわりつく「オープン認識」といった概念が提示されている。

この研究で用いられたものがGTAである。グレイザーとストラウスは、さまざまな現象を説明することの可能な誇大（グランド）理論から、現象を当てて仮説検証を進めるという従来の研究の進め方に疑問を抱いていた。そのため『死の Awareness』ではそのような既存理論の現象への当てはめではなく、フィールドワークによって得られたデータに根差して（grounded, 誇大（grand）との対比的な命名がされている）、理論生成を行ったものを提示したのである。

この『死の Awareness』でもデータ収集や分析をどのように進めたのかについて「付録」として説明はあったものの、より詳細には1967年の『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』（Glaser and Strauss 1967, 以下、『データ対話型理論の発見』）にて理論とはどのようなものか、また、どのように実証データを基に理論を生成するのが説明されている。ただし、同書ではデータからのコーディング方法は明確には示されていない。

3 様々なGTAのバージョン

その後のGTAの発展、あるいは手法の分化については、木下（1999, 2014）などに詳しい説明がある。ここではダイジェスト的に示す。

1967年の『データ対話型理論の発見』の後、GTAの分析手法について、もともとの提唱者、グレイザーが1978年に解説書『理論的センシビリティ』（Glaser 1978）を、約10年後の1987年にはストラウスが単著で分析手法の解説書『社会学者のための質的分析』（Strauss 1987）を出版した。ここまでは特に開発者2人の対立は表面化していなかったが、その後、ストラウスが看護学の領域でコービンと共著で『質的研究の基礎

——グラウンデッド・セオリーの技法と手順』（Strauss and Corbin 1990）を出版し、それに対しグレイザーが「ストラウス・コービン版に多く見受けられるミスリードさせるアイデアを直すため³⁾」に、『グラウンデッド・セオリー分析の基礎：浮上 vs 強制的当てはめ』（Glaser 1992）を出版し、GTAをめぐる状況は複雑化している。

現在、GTAの各バージョンの手法について木下（2014）が解説をしている。それによると、『データ対話型理論の発見』でのオリジナルの手法、オリジナルを引き継いでいるグレイザーの『理論的センシビリティ』（Glaser 1978）で示した手法、ストラウスの『社会学者のための質的分析』（Strauss 1987）で示した手法、および看護学の領域でコービンと共著で『質的研究の基礎』（第1版・第2版）（Strauss and Corbin 1990, 1998）で示している手法、さらにはストラウスが亡くなった後のコービンが主となって大幅な改訂を行った『質的研究の基礎』（第3版）（Corbin and Strauss 2008）での手法、ストラウスやコービンの教え子である戈木による手法（戈木 2013, 2014 など）、社会構成主義の立場からのシャーマズの立場（Charmaz 2006）がある。加えて、わが国では木下が上記の状況を批判的に検討したうえで、より研究結果としてまとめやすく大幅に手を加えた修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下 2003, 2007 など）がある。

4 GTAの各バージョンの共通する要素と分析手順の概要

上述したようにGTAと言ってもさまざまなバージョンが存在する。一方で、GTAをそれぞれ標榜していることから、共通性もある。

木下（2003）の言うGTAの5つの共通要素を基に説明する。まず、この研究法の目的として、データに密着した概念を生成し、そのように生成された概念の関係を説明する理論を生成するということが前提となっていることが共通する要素として挙げられる。別の言い方をすれば、GTAは理論生成を目的とするものの、あくまでもそれはデータに基づくもの（grounded）であるということが大前提となる。

また、もともとの生のデータ（インタビューや観察データ）から、抽象化して概念化を行うこと（オープン・コーディング）、生成された概念同士の関連性を検討すること（軸足コーディング、選択的コーディング）も各バージョンの共通要素である。

その他、研究対象とする現象と現象、現象とデータ、データとデータ、データと概念の間等で比較分析を継続的に行うこと、比較分析のために（つまり、一つ概念やカテゴリーで説明できる範囲を確定するなどして概念生成や理論生成を促すために）無作為抽出ではなく目的、意図的にサンプリングを行うこと（理論的サンプリング）、継続的比較分析と理論的サンプリングを行うことで、これ以上新たな概念が生成されないという理論的飽和を目指すこと等も共通している。

これらの共通要素を分析の手順で示すと、岡田(2010)が説明する以下のような概要となる。

文章化したデータは、まずよく読み込んで理解し、適当なまとまりに区切り、それぞれの文章をよく表す名前（ラベル）をつける（オープン・コーディング）。次に、似たもの同士のラベルをまとめて、グループごとにを集約するような名前（カテゴリー）をつける。ラベルとカテゴリーはいずれも概念であるが、カテゴリーの方が抽象度の高い上位概念である。なお、データの収集と分析は交互に継続して行われる。したがって、分析のなかで常に問いを立て、新しいデータを収集するときに、できるだけ多くの概念を見出しやすくするようデータを戦略的に収集する（理論的サンプリング）。理論的サンプリングをしても、データからはや新たな概念が生成されなくなるのを理論的飽和といい、これが分析終了を判断する基準となる。カテゴリーが見出されたら、今度は事象を説明する際に中心となる中核カテゴリーを見つける（選択的コーディング）。そして、この中核カテゴリーやそのほかのカテゴリーの関連を説明する。この作業から仮説が生まれ、仮説の蓄積と検証から理論が生成されるのである（岡田 2010：270-271）。

なお、本稿では各バージョンの手法について詳述することは紙幅の関係から困難であるため、詳細は各書籍に当たっていただきたい。

5 GTAの各バージョンにおける相違点

一方、各バージョン間の違いを述べたい。まず、分析の技法としては、インタビュー等で得られた生のデータをどのようにコーディングするのか（①切片化の問題：生のデータを行ごとなど細かく分ける切片化を行うのか、切片化を行うにしてもどのように切片化を行うのか、あるいはそもそも切片化を行わないのか、②生のデータからコーディングし概念を生成することについて、どのような段階を設けるのか）がある。また、細かな点では「ラベル」「概念」「カテゴリー」といった用語の使い方も異なっていることがある。これらは初心者でも目につきやすい違いである。また、根底となる大きな違いとして、研究の基となる認識論についてもグレイザー版やストラス・コービンを引き継ぐ戈木版は実証主義的色彩が強く、シャーマズの手法は社会構成主義的色彩がある等が指摘されている。

日本では、ストラウス・コービン版や、シャーマズについては翻訳版が出版されていることに加え、木下のM-GTA、戈木の手法の解説書については比較的普及している。グレイザー版についてはわが国では詳細な解説書は出版されていないが、志村(2008a, 2008b, 2008c, 2009)が連載で解説を行っている。

なお、M-GTAは他のGTAと違い、データの切片化や、データ収集とデータ分析の交互実施を行わないこと、プロパティ（データの特性・要素）・ディメンション（プロパティの程度）等を使わない等、GTAとはかなり異なる方法であると戈木(2014)は指摘している。データの切片化に関して、戈木(2013)はデータから距離を取ることで研究者の主観的・恣意的な解釈とならないようにするための手法として重視している。

しかしながら、M-GTAは、1967年のオリジナル版GTAやその他のGTAの手法を比較・吟味したうえで、GTA本来の趣旨である、データに密着した理論の生成という機能を重視して木下が開発した研究手法であり、先に示したGTAとしての主要要素は備えている。また、社会構成主義的観点からは研究者の視点を不純物として排除す

る必要は必ずしもないこと、M-GTAは研究を進める上で研究者自身が自らの視点にも自覚的であること等で恣意的・思い込み的な分析とならないよう工夫されていること、さらにはM-GTAを用いた研究数が昨今累積されてきていることから、M-GTAはGTAを語る上で重要な存在となっていると筆者は考える。そのため、本稿ではM-GTAもGTAのバージョンの一つとして扱うこととした。

また、GTAにこれから取り組もうとするとき、どのバージョンのGTAで研究を進めればいいのか、分からないという場合もあるように思われる。そして、たとえば、先行研究として読んだものが特定のバージョンのGTAを使用していたのでそれに倣ってそのバージョンを使用するか、あるいはたまたま特定のバージョンについて習う機会があったからそのバージョンを選ぶなど、偶発性に左右されることもあるかもしれない。また、締め切り等との関係、あるいはその研究者にとって理解しやすい等の現実的な理由から、特定のバージョンのGTAを使用するということもあるかもしれない。

ただし本来は、自分にとってなじむ認識論と親和性のある手法がいいのではないと思われる。すなわち、実証主義的な認識論で進めたいのであれば戈木版やグレイザー版ということになるだろうし、社会構成主義的な認識論ということであればシャーマズ版ということになるだろう。M-GTAについては、分析対象者や研究する人間の視点といった構成主義的な観点を含んだ手法になっている一方で、実証主義的な視点からM-GTAを用いて報告している研究も多く、双方に配慮されているとも言えるだろう。

結局のところ、研究報告を行うのはその研究者なのであり、読み手・聞き手（指導教員、査読担当者、聴衆や読者）へ実感を持って説明できる手法であることが重要であると考えられる。

Ⅲ 労働研究とGTA

1 労働研究におけるGTAの適用例

それでは、労働研究にはM-GTAを含めたGTAはどのように適用されているのだろうか。ここでは労働分野におけるGTAの適用例について、わが国で適用例が多いM-GTAと、それ以外のGTAに分けて見ていくこととしたい。

(1) M-GTAの適用例

小池・小松(2009)は、精神障害者、特に統合失調症者への就労支援のプロセスについて、一定年数以上の就労支援経験をもっている支援者17人に対し行ったインタビューより分析を行っている。この17人は所属施設の種類や事業の内容により設定している。具体的な分析テーマとしては、①統合失調症者の就労支援の展開プロセス、②統合失調症者の就労支援における支援者の支援行動、③統合失調症者の就労支援における意思決定を支える支援プロセス、の3つが設定された。

それぞれについて分析を行い、①については一方向に進む支援ではなく、常に支援の方針や内容を決める支援から各プログラムへと進む、循環した支援が展開されていることが明らかにされた。このテーマについては2つのカテゴリーと21の概念により説明されている。

②については、支援者の判断と当事者の意思決定の循環に基づいた方針決定を基点として、同時期に複数の支援行動が波状的に行われており、繰り返しの中でそれぞれの支援が相互に影響を及ぼしながら展開されていることが明らかになった。このプロセスについては13のカテゴリー、8のサブカテゴリー、67の概念で説明されている。

③については、就労支援において支援者自らの判断のみで支援を進めるのではなく、当事者の意思決定が重要視されており、それを尊重しながら、主体性を育てる支援や、考えや価値観を広げる支援を循環的に展開し、当事者が自分らしくかつ現実の状況に応じた意思決定を行うためのプロセスをとって、就労支援が進められていることが明らかにされている。このプロセスについては3つの

カテゴリー及び4つのサブカテゴリー、20の概念が生成されている。

道谷・岡田(2011)は、若年就業者の入社後の組織適応と職業的役割の探索とがどのように関連しているのかを探索している。特に「個人が職業的役割を探索するプロセスにおける、入社後3年間の組織適応の持つ意味とは何か」「入社初期段階のキャリア発達を促進するのはどのような要因か」の2点のリサーチクエスチョンを設定し、インタビュー調査によって得られたデータを分析した。インタビューは、社会人経験3年もしくは4年目の人に対して行われ、継続して勤務している6人(ステップ1)、転職を経験した5人(ステップ2)の計11人が対象であった。

最終的には13カテゴリー、3サブカテゴリー、43概念が生成された。主要な結果としては、組織参入後、働くことに慣れる状態に至るまでの間、自らの職業的な役割を探索するための行動を中断していることや、役割を学習し働くことに慣れていくプロセスを促進する要因として、上位者からの支援だけではなく、同世代から受ける様々な刺激があること、などが示された。

なお、この研究は量的研究に発展している。道谷(2011)の博士論文では、この研究で生成されたカテゴリーを先行研究で示されている概念と比較したうえで、4つのカテゴリーについて尺度構成を行い因子分析により妥当性を確認した。そのうえで、これらのカテゴリーを含んだ変数間の因果関係を共分散構造分析により実証的に検討し、他の変数を含めた総合的な分析モデルの中で、もともとはM-GTAで生成されたカテゴリーであった変数が有意な説明力を持つことを示した。

(2) GTAの適用例

高波・佐藤・松尾(2011)は、組織で健康づくりを行っている製造業の企業に勤務する中年期男性労働者を対象に、生活習慣の改善に取り組むプロセスとはどのようなものかを明らかにするためにインタビュー調査を行い、そこで得られたデータを分析している。対象者はある事業所(1カ所)に所属する製造部門の40歳以上の男性労働者9人であった。データは内容のまとまりごとに切片

化し、ラベル付けやカテゴリー生成等を行っている。

なお、分析手法に関してはChenitz and Swanson(1986)が引用されている。このChenitz and Swanson(1986)の執筆には、『質的研究の基礎』(2008)のStraussとの共著者であるCorbinも参加していることから、ストラウス・コービン版の系統的分析手法であると思われる。

分析結果の概要は、生活習慣改善の「導入の段階」、生活習慣改善を継続させようとする「定着化アプローチの段階」、新しい生活習慣改善に進むか継続できなかった生活習慣への再度の挑戦をする等方向性を定める「進退決定の段階」の3つの段階で示されている。また、それぞれの段階ごとに詳細にカテゴリー、サブカテゴリーを示している。例えば「導入の段階」では、生活習慣改善の主体性は「生活習慣改善の願望」と「実行可能性の認識」から推測され、一方で主体性が低い場合は他者からの「後押し」が補っていること等が示されている。

Tse and Yeats(2002)は、双極性障害の人が職業生活・人生をうまく送るためには何が有用なのかを明らかにするために、GTAによりインタビューデータを分析したものを報告している。インタビューは、ニュージーランドのダニーデン地域在住で双極性障害があり、薬物や身体的慢性疾患等他の障害が重複していない67人に対して行われた。分析手法としてどのバージョンのGTAを用いたのか明確な記載はないが、GTAの説明の中にストラウス・コービンの書籍の引用が見受けられる。

分析の結果、「双極性障害の急性期状態からのリカバリー⁴⁾」や、人々の精神障害者への態度やサポート、雇用情勢といった環境との「当てはまりの良さ」等の概念が生成された。また、「ホープ(hope)⁵⁾」の感覚を持つことや自己決定の重要性が示された。

2 労働研究へのGTAの適用——必要性と可能性

本稿の冒頭で述べたように、現状ではGTAが労働研究に多く用いられているとは言えない。この要因として、もちろんGTAに取り組む労働分

野の研究者自体が少ないという可能性もあるが、その他GTAあるいはGTA的な分析手法を用いたにもかかわらず、論文やキーワードに「グラウンデッド・セオリー」等の語を含めていない可能性もあるのかもしれない。そもそも労働研究の一分野として、労働社会学・産業社会学などがあり、「質的研究」というワードが注目される以前からそこではフィールドワークや聞き取りをし、そのデータを分析するというのが伝統的に行われてきた。さらには歴史的な文献の分析も行われてきた。そのためこれまで労働研究の分野では改めて、「GTAという明確な質的研究手法を用いて研究を行った」ことを表題やキーワードで示す必要性があまりなかった、ということも考えられる。

しかしながら、今後は労働研究において、GTA、あるいはGTAに基づいた研究手法を用いたと明示する意義は高まってくるように思われる。障害者や若年者、低所得者等の就労・労働問題への関心がかつてよりも高まってきており、社会福祉学やリハビリテーション、保健学といった分野から、労働に関する研究に取り組む研究者が増加することが考えられる。もともと労働研究には法学・経済学・社会学などの学際的なニュアンスがあったが、ますます学際的な色合いが強まっていくことが考えられる。このような中で、質的データをどのように分析するのかある程度明示しているGTAは、「共通言語」の一つとして労働研究においても適用される機会が増えていくのではないだろうか。

労働分野の研究として扱われるテーマはさまざまである。例えば、『日本労働研究雑誌』の投稿規定のキーワードでは、分野としては「その他」を除くと、「労働政策」「労働条件・人事労務」「労使関係」など16の分野が設定されている。これらを社会福祉的な観点から、働く人（労働者）自身の意識・技能、働く人同士の関係といったマイクロレベルのもの、職場・組織・企業といった集団というメゾレベルのもの、さらには法規や経済状況や労働市場といったマクロレベル、と分類することも可能であろう。

一方、GTAの開発者の一人、ストラウスは社会学のシンボリック相互作用論者⁶⁾（戈木2006）

という背景があることから、GTAを用いるためには分析対象となる現象が存在するだけでなくそれを解釈する「人間」が必要になると考えられる。そのため、純粋に考えればマイクロやメゾのレベルはもちろんのこと、マクロな現象を認識する「人間」を分析の対象とするのであればマクロなレベルでもGTAの活用は可能であろう。ただし、M-GTAに関し木下（2007）は、M-GTAがもっともフィットするのは、「人間」と「人間」が一定の環境下でやり取りをし、プロセス的な特性を持っているヒューマンサービス領域であるとしている。この指摘はGTA本来の趣旨を検討したうえでのものであり、M-GTAに限らず、GTAという手法がよりフィットするのはそのような領域であると考えられる。

このことを労働研究で考えてみると、特にGTAを用いて取り組みやすい研究テーマとしては、職業相談・キャリアカウンセリングやキャリア形成、障害のある人等の社会的に不利な状況に置かれている人を含んだ対象者への就労支援、安全衛生、労働相談といった分野になるのかもしれない。また、労働相談等のサービスの受け手（失業者等）だけでなく、サービスの提供者（専門家）に関してもGTAの適用可能性が考えられよう。

IV おわりに

本稿では、GTAの諸バージョンも含めた手法の概要について述べ、また労働研究への適用例を紹介し、適用可能性について考察した。GTAは労働研究でも今後さらに活用されていく研究手法の一つであると言えるだろう。

ただし、「流行」だからといって、インタビュー調査のデータの分析に無闇にGTAを適用する、というのはナンセンスである。自分が明らかにしようとしている研究対象が十分に解明されていない現象であり、その現象の理論的側面を明らかにする必要があるときに、GTAを適用すべきであろう。

さらに、GTAの結果として概念やその組み合わせによる理論が生成されることになるが、三毛（2005）が指摘するように概念の粗製乱造になら

ないようにすることも重要である。そのためには、既存の概念・理論との関係についても十分に検討する必要があると考える。

- 1) 2015年9月26日に実施。
- 2) Creswell and Miller (2000) は、「厚い記述」は質的研究による結果の妥当性確保のための一つの基準としている。なお、彼らは質的研究の妥当性確保のための手段には、他にも、複数の情報源から概念・カテゴリーが生成されたかという「トライアングレーション」や、研究に協力した人に分析結果・過程を示しチェックを受けるといった「メンバーチェック」などがあることや、研究者が依って立つ認識論によりどの手法を選ぶか異なってくることを指摘している。
- 3) グレイザーの運営する The Grounded Theory Institute のホームページより。(<http://www.sociologypress.com/books/classic_series/basics_of_grounding_theory.htm>) (2015年9月26日閲覧)
- 4) ここで言うリカバリーとは病気から回復したり治癒することを意味するのではなく、近年精神保健福祉領域で用いられている「リカバリー」の概念である。この場合、リカバリーとは「精神疾患の破局的な影響を乗り越えて、人生の新しい意味と目的を創り出すこと (Anthony 1993) とされる。そのため、病気自体は治っていないがリカバリーは出来る、という表現が可能である (大橋 2011)。
- 5) この「ホープ」とは「希望」と訳されることも多いが、加藤・Snyder (2005) によれば、日本語の「希望」には「あることを成就させよう」とねがい望むこと」といった願望とほぼ同じ意味で用いられるのに対し、hope には願望だけでなく期待や願望が達成されるという信念などの意味が含まれ、希望と hope には、ずれがあると考えられるという。
- 6) 言葉を中心とするシンボルに媒介される人間の相互作用に焦点を置き、「解釈」に基づく人間の主体的なあり方を明らかにしようとする現代の社会学・社会心理学理論の流れ (船津 1994)。

参考文献

大橋 秀行 (2011) 「精神障害者のリカバリーとは」『埼玉県立大学平成 23 年度 WEB 講座』。<<http://www.spu.ac.jp/view.rbz?pnp=116&pnp=159&nd=159&ik=1&cd=1088>> (アクセス日: 2015年9月30日閲覧)

岡田まり (2010) 『事例研究・事例分析』社会福祉士養成講座編集委員会 (編) 『相談援助の理論と方法Ⅱ』中央法規, pp.258-281.

加藤司・Snyder, C.R. (2005) 「ホープと精神的健康との関連性——日本版ホープ尺度の信頼性と妥当性の検証」『心理学研究』76, pp.227-234.

木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生』弘文堂。

—— (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂。

—— (2007) 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂。

—— (2014) 『グラウンデッド・セオリー論』弘文堂。

小池磨美・小松まどか (2009) 『精神障害者に対する就労支援過程における当事者のニーズと行動の変化に応じた支援技術の開発に関する研究』障害者職業総合センター調査研究報告

書 No.90.

戈木クレイグヒル滋子 (2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——理論を生みだすまで』新曜社。

—— (2013) 『質的研究法ゼミナール——グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ (第 2 版)』医学書院。

——編 (2014) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——分析ワークブック (第 2 版)』日本看護協会出版会。

志村健一 (2008a) 「グラウンデッド・セオリー——アクション・リサーチの理論と実際 No.1」『ソーシャルワーク研究』34, pp.71-75.

—— (2008b) 「グラウンデッド・セオリー——アクション・リサーチの理論と実際 No.2」『ソーシャルワーク研究』34, pp.143-147.

—— (2008c) 「グラウンデッド・セオリー——アクション・リサーチの理論と実際 No.3」『ソーシャルワーク研究』34, pp.232-235.

—— (2009) 「グラウンデッド・セオリー——アクション・リサーチの理論と実際 No.4」『ソーシャルワーク研究』34, pp.330-334.

高波利恵・佐藤しのぶ・松尾太加志 (2011) 「労働者の健康的な生活習慣への改善のプロセス——組織的な健康づくりを行う A 大規模事業所の中年期の男性労働者への面接から」『看護科学研究』9, pp.30-41.

船津衛 (1994) 「シンボリック相互作用論」見田宗介・栗原彬・田中義久 (編) 『縮刷版 社会学事典』弘文堂, pp.497-498.

三毛美子子 (2005) 『M-GTA を用いた社会福祉実践研究の実際と研究への助言——これから M-GTA を用いる人へ』木下康仁 (編著) 『分野別実践編——グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂, pp.23-59.

道谷里英 (2011) 『大卒若年就業者のキャリア発達プロセスと影響要因に関する研究』筑波大学審査学位論文 (博士)。

——・岡田昌毅 (2011) 「若年就業者のキャリア発達プロセスの探索的検討」『筑波大学心理学研究』41, pp.33-43.

南博文 (1991) 「事例研究における厳密性と妥当性——鯨岡論文 (1991) を受けて」『発達心理学研究』2 (1), pp.46-47.

Anthony, W. A. (1993) "Recovery from Mental Illness: The Guiding Vision of the Mental Health Service System in the 1990s," *Psychosocial Rehabilitation Journal*, 16 (4), pp.11-23.

Charmaz, K. (2006) *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide through Qualitative Analysis*, SAGE Publications Ltd. (抱井尚子・末田清子監訳『グラウンデッド・セオリーの構築——社会構成主義からの挑戦』ナカニシヤ出版, 2008年)。

Chenitz, W. C. and Swanson, J. M. (1986) *From Practice to Grounded Theory: Qualitative Research in Nursing*, Menlo Park, CA: Addison-Wesley (樋口康子・稲岡文昭監訳『グラウンデッド・セオリー——看護の質的研究のために』医学書院, 1992年)

Corbin, J. and Strauss, A. (2008) *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory* (3rd), Sage Publications, Inc. (操華子・森岡崇訳『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第 3 版)』医学書院, 2012年)

Creswell, J. W. and Miller, D. L. (2000) "Determining Validity in Qualitative Inquiry," *Theory into Practice*, 39 (3), pp.124-130.

Glaser, B. G. (1978) *Theoretical Sensitivity: Advances in the*

- Methodology of Grounded Theory*, The Sociology Press.
- (1992) *Basics of Grounded Theory Analysis: Emergence vs. Forcing*, The Sociology Press.
- Glaser, B.G. and Strauss, A.L. (1965) *Awareness of Dying*, Chicago: Aldine Pub. Co. (木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護——死の認識と終末期ケア』医学書院, 1988年)
- (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Pub. Co. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか』新曜社, 1996年)
- Hagner, D. and Helm, D. (1994) "Qualitative Methods in Rehabilitation Research," *Rehabilitation Counseling Bulletin*, 37, pp.290-303.
- Strauss, A. (1987) *Qualitative Analysis for Social Scientists*, Cambridge University Press.
- Strauss, A. L. and Corbin, J. (1990) *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, Newbury Park, CA : Sage. (南裕子監訳『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリーの技法と手順』医学書院, 1999年)
- Strauss, A and Corbin, J. (1998) *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory* (2nd edition), (操華子・森岡崇訳『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順 (第2版)』医学書院, 2004年)
- Tse, S. and Yeats, M. (2002) "What Helps People with Bipolar Affective Disorder Succeed in Employment: A Grounded Theory Approach," *Work*, 19, pp.47-62.

わかばやし・いさお 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科助教。最近の主な論文に「働く障害者の職業上の希望実現度と職務満足度が離職意図に及ぼす効果」(2007年)『職業リハビリテーション』21 (1), pp.5-21。職業リハビリテーション, 障害者就労支援専攻。